

8) 胃悪性リンパ腫の5例

真保 禎二 (新潟臨港総合病院
放射線科)

過去約5年間に原発性胃悪性リンパ腫5例(34才女, 66才男, 56才女, 52才男, 50才女, 症例3が早期 sm, 他の4例は進行悪性リンパ腫)を経験したので, そのX線所見を主に報告した.

X線上癌との鑑別点として, 1) 胃壁の硬化比較的少なく, 進展性良好である. 2) 巨大皺襞も軟らかく, 浮腫状に肥大している. 3) 周堤の輪郭は平滑, 鮮明である. 4) 病変の一部に粘膜下腫瘍の所見を認める等があげられる.

なお, 進行例はすべて Ga シンチで病変部に著明な集積を認めた.

9) 当科における食道癌治療の現況

末山 博男・滝沢 義和 (琉球大学放射線)
諸見里秀和・中野 政雄 (医学教室)

昭和61年3月より当科入院症例を化学療法適格例と非適格例に分け, 前者には照射前化学療法を行ってきた. これには13例が登録されたが, 評価対象は12例であった. 化学療法は CDDP と 5-FU の 120 時間持続静注で, 3週に1度投与を2~5サイクル行った. 評価対象のうち, 5例は遠隔転移を伴ってなり, 残り7例は局所進行癌であった. 照射前化学療法全体の奏効率は75%であり, 前者は80%, 後者は57%の奏効率であった. しかし放射線治療など最終治療後では, 遠隔転移例は60%, 局所進行癌は71%が CR となった. なお, 化学療法単独治療例が2例あり, 27カ月, 15カ月それぞれ生存中である. 以上より, 進行食道癌の治療方針において, 化学放射線療法を第1選択とするプロトコルを推進中である.

10) 当科における肺腺癌の治療成績

三浦 恵子・小田 純一 (新潟大学放射線科)
斎藤 眞理・酒井 邦夫

1981年から1987年の7年間に, 当科で肺腺癌の原発巣に対して 40Gy 以上の照射を行った28例について検討した. 男女比は19対9, Stage は, III・IVが多く, Stage Iは25%, Stage IIは0%であった.

治療成績は, 根治照射例全体では, 3年生存率32%, 5年生存率26%, 50%生存期間11カ月と良好な結果が得られた. Stage 別の3年生存率は Stage I で65%, Stage III 29.5%, Stage IV 11.5%だが, 各 Stage 間に有意差はなかった. 化学療法は17例に併用されたが, 化

学療法の有無によって生存率に有意差は認められなかった.

長期生存例は6例あり, Stage I が3例, III b が2例だった. いずれも 60Gy 以上照射されている. また, Stage I は, 28例中7例だったが, いずれも高齢者で, 放射線療法単独例が多く, 照射野は原発巣に局限したものが多かった. リンパ節再発した2例には, 再照射がなされた.

11) 抗癌剤経口投与後の腫瘍組織内濃度と細胞動態

藤田 勝三 (新潟大学医療短大)
日向 浩・酒井 邦夫 (同 放射線科)

悪性腫瘍に対する放射線と抗癌剤の併用療法では両者の投与タイミングが問題となる. これを解決するためには, まず, 抗癌剤の腫瘍内濃度と細胞動態を把握することが大切である. マウス実験腫瘍を用いて, UFT 経口投与後の腫瘍内 5-FU 濃度の測定とフローサイトメトリーによる細胞動態解析を行った.

FM3A 細胞を C3H マウス大腿部皮下に移植し, 腫瘍体積が 300~500mm³ に達してから UFT (FT 量で 15mg/kg) を1回経口投与した. 1, 3, 5, 7, 10, 12, 15, 20時間後に腫瘍を摘出し, 5-FU 濃度測定と細胞動態解析を行った.

腫瘍内 5-FU 濃度は, 投与1時間後に 0.75 μ g/g で, 時間の経過につれ減少し10時間後には 0.08 μ g/g, 12時間後に 0.23 μ g/g に上昇し, 20時間後には 0.10 μ g/g であった. DNA ヒストグラムは, 10時間以後に明らかな変化が認められた. 10~15時間後に G₁ 期細胞の減少と S 期細胞の増加が, 15~20時間後に G₂+M 期細胞の増加が認められた.

12) 縦隔原発と考えられる悪性黒色腫の1例

樋口 健史・秋田 真一 (新潟大学)
斉藤 眞理・稲越 英機 (放射線科)

症例は34才の男性. 生下時から巨大色素性母斑があり, 母斑切除および植皮を施されている. 職場検診で胸部X線写真上異常陰影を指摘され, 当院を受診. 初診時のCTでは前縦隔の腫瘍と, その心臓への浸潤が認められた. 胸水及び心嚢液細胞診で褐色のメラニン色素を持つ腫瘍細胞が多数認められ, また免疫組織染色でも S-100 蛋白陽性で悪性黒色腫と診断された. 全身の皮膚, 口腔及び肛門粘膜, 眼球には悪性黒色腫として疑わしい病変は認められなかったことから, 本症例は前縦隔原発の可